傾いた城伝説

20 世紀に入ると、松本城はほとんど使われなくなり、放置されるようになった。屋根や外装の老朽化に加え、土台が腐り、大天守が大きく傾くという事態は、松本城の最も劇的な伝説のひとつを生んだ。
1686 年、庄屋・多田加助（1639-168~~7~~6）は、松本城代が課した増税の廃止を求めて 1 万人の村民を率いて抗議行動を起こした。この地域の農民は最近不作で、税は米で支払われるため、多くの農民は飢餓の危険を冒さなくては増税された税を支払うことができなかった。
一揆に発展することを恐れた行政側は、すぐに多田の要求を受け入れ、増税の撤廃を保証する文書を提示した。しかし、その直後、行政府は多田とその家族、それに従者 20 人ほどを拘束し、獄に入れた。書類も没収された。
多田が公開磔刑に処せられる日、大勢の人が集まり、祈りを唱えた。多田は「減税は実現する。」と語りかけ、処刑の直前に減税の約束が反故にされたことを知った加助は、最後の息で約束された税率を何度も叫んだ。そして、怒りに満ちた血走った目を最後に城に向けると、恐ろしい地響きとともに大天守が西に傾いたという伝説が残っている。